



検査だより第75号

2022年3月1日発行

～検査だよりは検査部が年3,4回発行している不定期広報誌です～

COVID-19(第6波)と 検査部長退任について

検査部技師長 堀田 多恵子

検査部では院内のほぼすべてのコロナPCR検査を実施しています。第6波になってから、特に2月からの検査数はそれ以前と比べて3倍増の状況です。

第5波においてはアルファ株からデルタ株へ置き換わり、昨年9月には殆どがデルタ株である状況でしたが、ワクチン接種率が高まるにつれ、11月～12月は沈静化し、陽性検出がない平穏な日々でした。しかしその頃、欧米ではオミクロン株による桁違いの新規感染者数が報道されていたので水際対策を以て国内に侵入しませんように、と祈っていました。祈りも虚しく…第6波ではオミクロン株ばかりが検出されます。

オミクロン株は病原性や増殖能はデルタ株に比して低いと云われていますが、感染力が高いため全国的に新規感染者数が過去最多を更新しています。(2022/2/8現在)スーパーコンピューター「富岳」を用いた研究ではマスク着用でも50cmの近距離で15分間の対面会話をすると感染確率が14%に高まるとシミュレーションされています。「マスク着用」だけで油断せずに、人と接触する時間や会話する距離にも注意が必要です。

特に病院においては免疫が低下している患者さんが多くいらっしゃいます。新型コロナウイルスの感染対策の原点に戻って実践することが大切です。

検査部では今年3月末に15年間検査部の部長として検査部を率いて医療に貢献され、臨床検査医学研究を推進してこられた 康 東天部長の退任を迎えます。このコロナ禍でなければ、盛大に謝恩会を開催したいところですが、退任記念講演会の形式で ～感染対策の原点を守りながら～ 康 東天部長の新しい門出を、精一杯、たくさんの感謝の心をこめてお祝いしたいと思います。

康 東天 教授・部長の臨床検査医学の最終講義はYouTubeに公開中です。

URL: <https://youtu.be/pLjp7uPT2g0>



《今号の紙面》

検査部技師長よりあいさつ …p.1

「九州大学病院検査部での26年を振り返って」

検査部部長より …p.2,3

鉄分検査室・編集後記 …p.4

* 九州大学病院検査部での26年間を振り返って *

検査部部长 康 東天

1996年に助教授(当時)、副部長として検査部に着任し、2006年から教授、検査部部长として引き続き勤務した後、2022年3月末に定年退任します。足掛け26年間になります。この間、研究室・検査部の多くのスタッフの尽力、そして各科各部署の人たちの協力に恵まれ、伝統を守りつつ新しい検査の提案もでき、そして何より重要な精度の高い迅速な日常検査の発展に多くの貢献ができました。現在、九大病院の検査部は年間700万件を超える検査を実施し、診療に必須な検査情報を届けています。

26年前に着任した時には検査部はまだ旧病院の外来棟の中にあいました。そこで働いていた時にはその古びた検査部内の部屋にそこはかとなく検査部の歴史も感じていました。ただ、シロアリの羽が舞い落ちたり、雨が降るとそこかしこで雨漏りがし、ひどい時にはある部屋の床全体が水浸しでベンチの上の機器にはビニール袋を被せてなんとか被害を免れたというような経験が懐かしく思い出されます。ちょうど私が教授になる前後に検査部は漸次新病院に移転し、九大病院検査部が誇る(?)検体が頭上を走る高架搬送というほぼ全自動の検体検査室が出来上がりました。当時は本格的な高架搬送というシステムは(私の記憶では)日本にはなく世界的にも珍しいものだったので、当初は国内外から多くの見学や視察のための訪問者がありました。新病院に移転後10年のシステムの全面更新では、増え続ける検査数に対してその高架搬送のスピードが追いつきにくいことやレイアウトの変更に難しい点があることから、フラットな検体搬送システムになって現在に至っています。



教授就任祝賀会にて



検査部 60周年記念祝賀会にて

私が助教授の時代、つまり前任者の濱崎教授は九大検査部の特色ある新しい検査として、遺伝子検査を含む血栓性素因の総合的検査システムの構築をライフワークとしており、私は当時遺伝子検査室の責任者をしてきたこともあり、その立ち上げにいくばくかの貢献ができました。私が教授になった後もそのユニークなシステムを維持し、今でも学内外、国内外から多くの検査依頼や共同研究依頼があり、現時点で累計約500件に上っています。特に小児科大賀教授のAMED研究班で新生児血栓症の診断基準作成に協力できたことは、濱崎教授への恩返しの一つになったかと思っています。

私が教授になってからのことも少し述べると、私の研究の専門領域であるミトコンドリアの遺伝子検査を開始し、現在までに累計約300件になっています。その検査の蓄積から、非常にユニークなミトコンドリア脳筋症の家系が見出されました。その分子生物学的解析はミトコンドリア脳筋症の初めて根本治療薬の開発につながる可能性を示唆しており、大いに期待しています。



部員・研究室スタッフの交流を兼ねて山登りもしました

質量分析解析を用いた精神科とのうつ病患者診断の客観的新バイオマーカー探索の共同研究も、現在流行のAI技術を用いた解析法開発を組み合わせ、大きな進展を見せており今後の発展を非常に楽しみにしているところです。

もう一つ、共用基準範囲の策定や医療情報ビッグデータにおける臨床検査の標準コード化など、臨床検査の標準化に大きな貢献ができたことも、九大検査部にとっての大きな財産となっています。

最後に全ての検査部技師、研究室スタッフの協力を改めて感謝し、今後の検査部、そして九州大学病院のさらなる発展を祈念します。



最終講義の後、研究室スタッフと



雑餉隈・春日原間新駅工事と臨時急行「初詣号」

今年は鉄道風景が大きく変わる年である。

今秋、西九州新幹線武雄温泉から長崎間が開業予定で、年明け早々、新幹線<かもめ>車両の最初の編成6両が海上輸送され川棚港で陸揚げされ大村車両基地に搬入された。

また身近なところでは長らく続けられていた工事がいよいよ完了を迎え、西日本鉄道天神大牟田線 雑餉隈から下大利間約5.2kmの高架化が今夏行われる予定である。高架化区間内にある16ヶ所の踏切が解消され道路の渋滞の緩和も期待される。

この高架化に合わせて雑餉隈・春日原間に新駅が開業する。西鉄天神大牟田線では平成21年(2009)2月24日開業の紫駅以来で、令和になって初めての新駅となる。駅名はまだ決まっておらず今夏公表される。

天神大牟田線と県道49号大野城二丈線が交差する場所に既に新駅駅舎が姿を見せ始めている。現在地上線の電車が高架駅舎の直下を走り抜ける過渡期の貴重な鉄道風景を見ることができる。

編集後記

2022年3月末をもって康 東天(Dongchon Kang) 検査部部長が退官されます。四半世紀を九州大学病院検査部で過ごされ、九州大学検査部の充実、発展に努めてこられました。検査だよりでは検査部部長挨拶として表紙を飾り、造詣の深い文章に常に感銘を受けてきました。編集後記では康部長の挨拶を受けてのネタ作りに明け暮れていましたが、それがなくなることで寂しくなる気持ちでいっぱいです。しかし、康部長の口癖である「リサーチマインド」を持つ検査技師に皆がなれるように日々精進する次第です。康部長お疲れさまでした。

(内海健)